

『うつほ物語』における俊蔭女の美

——「横の繋がり」との関わりを中心に——

狹猪 川 優 子

はじめに

『うつほ物語』において、俊蔭一族が至宝である琴を媒介として「繋がり」を形成していくことについては以前論じたところであるが、琴を直接贈与し、「横の繋がり」を形成する主たる担い手としての俊蔭と仲忠とに着目した、いわば骨格部分に言及するにとどまっていた。そこで本稿においては肉付けをしていくという意味で、俊蔭女が「横の繋がり」に関わる側面に注目する。俊蔭女は女性であり、横井孝氏が「俊蔭女の生み出す物語の構造が彼女の女（性）に寄りかかっている」と述べておられるように、俊蔭や仲忠とは異なる側面を持ち合わせている。ここでは俊蔭女の（女性）性を、俊蔭女の物語にとどめるのではなく、「横の繋がり」の形成に、なくてはならないものとして考える。すなわち、特に今回は俊蔭女の美に着目するのであるが、それが単なる特質として描かれているのではなく、自身に対して、あるいは一族に対して、「繋がり」を形成するという点

で効力を発揮していると考えるのである。そこで、物語において俊蔭女の美を辿り、美の効力や必然性、ひいては俊蔭女が「横の繋がり」に果たす役割について明らかにしたいと試みる。

一 俊蔭女の美

まず、俊蔭女の美が描かれる場面について概観する。初めて俊蔭女の美が明らかにされるのは、十二、三歳頃のちよと裳着にあたる時期であり、女性として物語に認知されるのと同時期である。ここでは「かたち、さらに言ふ限りなし。あたり光り輝きて、見る人まばゆきまで見ゆ」（俊蔭 二二頁）ほどの美であり、その評判は帝にまで達する。この流れは『竹取物語』との類似が見られるのであるが、ここでは、美が帝と繋がるきっかけとなり得るということが『うつほ物語』においても確認出来るという意味で重要である。

しかしその後の俊蔭女の美は、兼雅との逢瀬において兼雅自身が「あやしく、めでたき人かな」（俊蔭 二五頁）と思う他は、仲忠に秘曲伝授を終えるまで特に描かれない。俊蔭女の美が描かれるのは伝授終了以降であり、次のような場面にあらわれている。

場面Ⅰ	兼雅との再会	①②③
場面Ⅱ	尚侍宣旨	④⑤
場面Ⅲ	仁寿殿女御との対面	⑥
場面Ⅳ	兼雅の妻たちとの同居	⑦⑧
場面Ⅴ	京極邸における弾琴	⑨⑩

以下、この表の場面ごとに俊蔭女の美についてみていく。なお、表中の丸数字は俊蔭女の美が描かれている箇所便宜上番号を付したものであり、引用本文の数字と対応している。

二 場面I——兼雅との再会

俊蔭女は、仲忠に秘曲を伝授し終わると、仲忠と琴を演奏するだけの日々を送ることとなる。仲忠もそろそろ元服を迎えようかという時期であり、そんな中、俊蔭女の美が描かれる。

①かくて、この子、十二になりぬ。かたちの麗しくうつくしげなること、さらにこの世の者に似ず。(略)母も、父君添ひてい

つきかしづきし時よりも、顔かたちはまさりて、めでたきこと限りなし。 [俊蔭 四二頁]

俊蔭女は、以前にまさる美をまもっている。ここに俊蔭女の美が描かれることについては、少し唐突であるように思われるが、その重要性については後に明らかになる。以下の流れをみていくと、直接、東国武士の来襲があり、俊蔭女は秘琴を弹奏、その音を聞きつけた兼雅がうつほを訪れるという展開となっている。この、兼雅の来訪に注目したい。零落後ほとんど描かれなかつた俊蔭女の美が、兼雅との再会の直前に描かれたということに、両者の連関性を読みとるのである。そしてさらにこの美は、仲忠への秘曲伝授が終了し、うつほ暮らしの必要がなくなり、俊蔭女が再び京の舞台へと復帰する段階へと達したことを予感させる。俊蔭女の復帰の手段が、京へ連

れ帰る存在である男性との出会い、すなわち兼雅との再会であるゆえ、俊蔭女の女性としての美を描く必要があった。この俊蔭女の美は、京への復帰の伏線であると考えられるのである。

俊蔭女の美は、兼雅の三条邸に迎えられた時に再び描かれる。

②暗うて物も見えねば、御手づから御格子一間上げて見給ふに、

秋の朝ぼらけに、玉と磨きしつらひたる所に、殊なる飾りもな
くやつれ、なかなかなる様なれど、言ふよしなくもてはやされ
て、清げに類なく見ゆるを、「天女を率て下ろしたる」と驚かれ

給ふ。子も、はかなき水干装束なれど、かたちまさりて、いと
めでたし。女は、「年ごろに、いみじうやつれぬらむ」と思ふに、

いとまはゆきまで恥づかしきに、母をも子をも、つくづくとも
もり給へば、 [俊蔭 五二頁]

③北の方、御歳三十に少し足らぬほどなる、御かたちただ今盛り

にて、思はずことなくておはするままだに、光を放つやうに見え
給ふ。 [俊蔭 五三頁]

うつほから京に戻った俊蔭女が、その美を再確認される場である。俊蔭女は、この先上流貴族たちとのつきあいが始まること予想される。財力や後ろ盾もない状況で、京においても通用する美を確認することは、俊蔭女にとって必要なことであった。そしてそれは、俊蔭女が美を抛り所の一つとして自らの位置を確保していくという側面的一端ものぞかせているといえる。

三 場面Ⅱ——尚侍宣旨

三条邸に迎えられ、俊蔭女は仲忠の母であると同時に、兼雅の妻でもあるという存在になった。その美は、特にあらためて描かれることはなく、如才ない妻としての役割を果たしながら物語は進んでいく。次に俊蔭女の美が描かれるのは、「内侍のかみ」巻を待たなければならぬ。

④北の方、洗ましたる御髪の干たるを掻い梳り、花文綾の地摺りの御裳に呉綾重ねて、涼しきほどなれば、綾の掻練一襲、赤色に二藍襲の唐衣いとめでたき奉りて、なてふめつらかなるわざもせず、かくばかりにて、大人六人・童四人・下仕へ二人して出で立ちて、御簾のもとについ居給へるを、庭に手火燈して候ふ松明の光に、中将見るに、まして、さらなり。御髪はほど、丈に二尺ばかりあまりて、少し小まろがれする髪を掻き洗ひたるすなはち、一背中こぼるるまであり。さらに、一筋散りたるもなし。姿のうつくしげなること、さらにいとめでたし。丈立ちよきほどに、姿の清らなること、さらに並びなし。顔かたち、さらにも言はず。仲忠、これを見るままに、藤壺を思ひ出でて、この北の方を、さらに親と思ひ忘れて、「いづくなりし天女ぞ」と思ひ居たり。北の方、「さらば、車寄せさせ給へ」。中将、「ただ今、おとどの見給はぬこそ、いとくちをしけれ」とて、「御車寄せよ」とて、手づから御几帳さして、後に大人二人、副

車に次々人乗りて、出で立ち給ふ。「内侍のかみ 四二〇頁」波線部分に注目したい。俊蔭女は、とりたてて普段と違ったよう
に飾っているわけではない。ここに、自然に備わる俊蔭女の美の効
力が逆に強調されているとみてとれるのである。それではなぜ、こ
れほどまでの美が描かれなければならなかったのだろうか。この場
面は、仲忠が朱雀帝との碁の勝負に負け、俊蔭女を参内させるよう
命じられ、俊蔭女を迎えに来たところである。この後、俊蔭女は参
内、琴を演奏し、朱雀帝から尚侍宣旨を賜る。この、尚侍宣旨に結
びつくと考えられるのである。すなわちここでの美は、俊蔭女が尚
侍宣旨を賜るにあたって、朱雀帝にふさわしい美を備えた女性とい
う位置にまで高めるといふ意味をもつ。これは、この時点で話題が
俊蔭女と朱雀帝とを結ぶ方向へと展開していくことを示している。
仲忠が、俊蔭女の比類ない美しさを見て、兼雅が見ることがないの
を残念がることから、俊蔭女の美が、兼雅ではなく朱雀帝に向け
られていることが感じられる。この美は、尚侍宣旨の準備であるとい
える。そして次に見られるように、期待通り、朱雀帝の目にも俊
蔭女の美は十分に伝わる。

⑤かの尚侍のほど近きに、この壺をさし寄せて、包みながらうそ
ぶき給へば、さる薄物の御直衣にそこら包まれたれば、残る所
なく見ゆる時に、尚侍、「あやしのわざや」とうち笑ひて、かく
聞こゆ。

衣薄み袖のうらより見ゆる火は満つ潮垂るる海女や住むら

む

と聞こえ給ふ様、めでたき人の物など言ひ出だしたる、さらなり、し出だしたる才など、はた、いとめでたく心憎き人の、そのかたち、はた、世に類なくいみじき人の、さる勞ある物の光にほのかに見ゆるは、まして、いとなむ切なりける。上、御覽するに、譬ふべき人なく、めでたく御覽すること限りなし。

〔内侍のかみ 四三七頁〕

これは、仲忠が捕らえた螢を朱雀帝が俊蔭女の几帳の内側に放ち、その姿を照らす場面である。俊蔭女は笑いながら歌を詠み、朱雀帝はその姿に見惑れる。俊蔭女の美は、尚侍宣旨の大きな助けとなる。もちろん、彈琴の技あつての宣旨ではあるが、朱雀帝との結びつきには美は不可欠であるといえる。次の引用に注目したい。

帝、「わりなく言ふものかな。これにつひに負けぬることのねたさ」など思ほして、「これならぬことは、何ごとをかは言はむ」と思すに、仲忠の母に、年ごろ、「いかでか」と、御心に思しわたり、昔より聞こし召しかけて、「いかで」とのみ思ほしければ、よにも聞こえざりければ、くちをしく思ほしけることの「かく、今、世の中にあり」と聞こえ、ただ今の勞者・かたち人の二、三の者のうちに入るを、「これがついでにのたまひ奇らむ」と思して、

〔内侍のかみ 四一五頁〕

朱雀帝が俊蔭女を参内させたいと望む際、心に思うのは、世の中の美人の中でも二、三の指には入ると噂されている俊蔭女の容姿であ

る。朱雀帝にとつて彈琴は、俊蔭女を見るための口実であるとされている。俊蔭女が参内するためには、秘琴とその秘曲を継承する人物というよりも、当代きつての美人であることの方が、効力を發揮するのである。

四 場面Ⅲ——仁寿殿女御との対面

次に俊蔭女の美が描かれるのは、朱雀帝の寵愛を一身に集める仁寿殿女御と対面する場面である。俊蔭女は、孫いぬ宮が誕生する時に、同じくいぬ宮の祖母に当たたる仁寿殿女御と顔を合わせる。

⑥かくて、女御の君、極き抱きて、さし出で給へれば、尚侍のおとど、抱きて、典侍に渡し給ふ。今は、御湯浴むし奉る。尚侍のおとど、裳の上につい居給ひて、御迎湯参り給ふ。御髮、御裳に少し足らぬほどにて、笠しかけたることとして、白き御衣に、隙なく揺り懸けられたり。縫れたる御裳にうち疊なはれたる、いとめでたし。御髮つき・姿、言ふ限りにあらず。ただ今、二十余に見え給ふ。中納言が親とも見えて、歳二つばかりのほらからに見ゆ。

〔葦開・上 四七九頁〕

この場面において俊蔭女の美については描かれているが、仁寿殿女御についてはふれられていない。ここに、描写の有無による俊蔭女の美の強調がみられる。仁寿殿女御にまさる俊蔭女の美は、京極邸における彈琴披露の場において、正頼の目によつて描かれる。

尚侍、様体細やかに、なまめかしう、「あな清らの人や」と見え

たり。ただ今二十余ばかりにて、装の裾に溜りたる髪、艶々として、裾細からず、また、こちたからぬほどにて引き添へられて、ゐざり入り給ふを、左のおとど、几帳さし給ふままに見給ひて、「いとみじかりける人かな。歳のほど、大将の妹と言はむにぞよき。仁寿殿の女御には、様体・けはひもまさり給へり。昔の心ならましかば、かかるを見過ごさましや」と、ねたうおほえ給ひ、からく思したり。「楼の上・下 九二四頁」

仁寿殿女御の父正頼は、俊蔭女をかいま見て、思わず自分も言い寄りたいほど心を惹かれる。正頼に映る俊蔭女は、自分の娘である仁寿殿女御よりも美という点ではまさつていたのである。

ここで、物語に登場する女性たちの中の俊蔭女の美の位置について少し言及する。仲忠と典侍の語りの中で、世の中の美人について典侍が語る場面がある。

典侍、「否や。まことは、いとどいみじきや。ただ今の人人は、三条殿の北の方ぞ一、藤壺二、宮三にこそおはすめれ。男は御前」。

典侍は、当代の美人の第一は俊蔭女、第二はあて宮、第三は女一宮と語る。しかし、物語の中で俊蔭女とあて宮のどちらが上位なのかについては、俊蔭女と仁寿殿女御のように直接比べられることはない。このことについて、杉本雅子氏は、

理想的な女性俊蔭女と、理想的な女性あて宮とが、対決することはない。同一の場面に姿を現して、それぞれが活躍することはな

いのだ。たとえ、同一場面に登場しても、時間がずれていたたり、一方が他方を圧倒したりしている。しかも、どちらかが常に他方を圧しているということもない。あて宮は俊蔭系物語のわき役であり、俊蔭女はあて宮系物語のわき役なのだ。二人とも、それぞれの物語の中心人物という役割りを担つて、他の物語中に存在することはないのだ。

と、二つの物語軸の違いから両者が対峙しないと述べておられる。

しかし、これは単に、俊蔭女と仁寿殿女御とは朱雀帝をめぐる関係があるが、あて宮は春宮后であり、競う理由がないという、世代の違いではないだろうか。あて宮と比べられるのは、とりわけ仲忠の妻である女一宮である。あて宮と女一宮は昔からの友情で結ばれているが、仲忠にとってあて宮は想い人であり、あて宮は仲忠と結ばれなかつたことではしばしば胸を痛めている。あて宮と女一宮とは、仲忠をめぐる微妙な関係があるのである。俊蔭女の美があて宮との関係の中で描かれないうのは、俊蔭女にとつてあて宮は仁寿殿女御などと違って意識するべき存在ではなく、直接美を誇示することによって優位性を示す必要がないといえるのではあるまいか。俊蔭女にとつて重要なのは、あて宮と競うことではなく、尚侍旨官を受けて高位の女性たちとのかわりが増えてくる「蔵開・下」巻で、他の女性に引けを取らない存在として安定した地位を保っていることとであり、なかでも仁寿殿女御との位置関係をはかることなのである。

五 場面Ⅳ——兼雅の妻たちとの同居

つづいて俊蔭女の美が描かれるのは、三条邸に兼雅のかつての妻たちが迎えられる時である。

まずはじめに、嵯峨院女三宮が迎えられる。さきに仲忠が女三宮の暮らす一条邸を訪れ、一条邸の様子を兼雅と俊蔭女に報告する。その三人の語らいの中で描かれるのが次のような場面である。

⑦おとど、「さて、そこはつき給へりや」とて引きまさぐり給へば、「うたて、戯れ給へる」とて、うちむつかりて、後ろ向き給へる御髪の、整しかけたるごとくして、九尺ばかりあるを繰り出で給へれば、「御座広がりて、いとめでたし。」この御後ろ手の

広がり懸かるに見つきてこそは、我は聖になりたれ。(略)「

〔蔵開・中 五六九頁〕

ここには、俊蔭女の美しい髪に戯れる兼雅の姿が描かれている。俊蔭女の髪的美しさについては、女三宮が迎えられた後の三人の語らいの中でも話題になる(蔵開・下 六〇〇頁)。俊蔭女は謙遜するが、兼雅や仲忠、とくに兼雅は俊蔭女の髪を称賛するのである。ここで女三宮の美は描かれず、俊蔭女の美しさのみを描くことによつて、彼女の優位性を示しているといえる。

続いて故式部卿宮中君が迎えられる。故式部卿宮中君については、その容姿が描かれる場面がある。

君、昨夜、おとどの包ませしておはしたる綾搔練・織物の細長な

ど着給ひて、歳四十に一二つ足らねど、いと貴はかに、子めきて、らうたげなる顔して、髪、丈に二尺ばかりあまり給へり。いと若く見え給ふ。」〔蔵開・下 六一〇頁〕

ここには、故式部卿宮中君の若々しい美しさが描かれているが、注目したいのは、その後すぐに兼雅が俊蔭女を訪れる場面において、俊蔭女の圧倒的な美しさが描かれていることである。

⑧かくて、北の方の御もとにおはして見給へば、装束清らにして、頭梳りて居給へれば、ただ今婿取りもしつべき娘のやうにて、いとめでたし。住まひ・しつらひ、言ふ方なし。暗き所にも、北の方、御かたち・様体、照り輝きて見ゆ。香の香ばしきことは、さらにも言はず。御達も、かくかたちあるは、三十人ばかり出で入りすれど、なほ、二十人ばかり、絶えずあり。童・下仕へも、あまたあり。この殿は、一町なれど、年ごろ、買ひ広げつつ、心に入れて、多くのおとど造り重ねたり。

〔蔵開・下 六一〇頁〕

俊蔭女の姿は、すべてにおいて申し分なく、故式部卿宮中君など比べものにならないように思われる。特に、「ただ今婿取りもしつべき娘のやうにて」という表現には、新しく迎えられた故式部卿宮中君に対して、妻としての新鮮さでも引けを取らない姿が強調されている。また、故式部卿宮中君の美は、後に兼雅が妻たちについて語る場面で、「式部卿の君は、心幼くて、乳母の物言ひ、なめし」(楼の上・上 八四五頁)と、若々しさが否定的な意味をもつて語ら

れるようになる。この後、兼雅は女三宮の、もとへも訪れるが、そこに描かれる女三宮の姿も、先程の俊蔭女には及ばない。

こなたは、右大将殿の御方にて、「一の宮も通はし奉らむ」と思して、寝殿の南遠く去りて、池・山近き所、「月見給ふべく」とて、高く蔽しく、今造られたる、西の対・廊あり。御達十人ばかり、童部などあり。宮は、いとらうらうじう、気高く、ものもしき顔して居給へり。

〔葦開・下 六一一頁〕

最後に迎えられる宰相上だけは、少し様相を異にしている。ここには、仲忠の視線が加わる。仲忠は、石山寺で偶然宰相上と出会い、対面する。仲忠は宰相上に懸想心を抱き、その視線で宰相上は描かれるのである。

・日暮れて、屏風のもとにて対面し給へり。いと貴に、けはひなども、式部卿の君よりも、心憎く恥づかしげにものし給へり。院の女御の御声におぼえ給へり。若君の御ことも、おいらかにのたまふ様、恥づかしげなり。

〔楼の上・上 八三二頁〕

・南の費より上りて覗き給へば、東の妻戸の簾上げて、人もなしめし居たり。母屋の方の柱に、いと濃く黒き桂の艶やかなる一襲、薄縹の綾の張綿重ねて着て居たる人の、髪、糸を縫りかけたるやうに艶やかに長げなり。額に懸かれるほど、いとうつくしげなり。聳やかにまめかしきかたち、尚侍の御様体・かたちにおぼえたり。

〔楼の上・上 八三六頁〕

・いとめでたう、限りなき人の御けはひにも通ひたれば、いとま

めやかなる御心、少し僻言も聞こえつべけれど、「あるまじく、便なきこと」と思ひ返し給ひつつ、さも聞こえ給はず、

〔楼の上・上 八三七頁〕

仲忠の目に映る宰相上の姿は、「故式部卿宮中君よりも上で、仁寿殿女御の声に似る」→「俊蔭女に似る」→「あて宮に似る」と、徐々に変化する。あて宮は、仲忠の想い人であり、ここで宰相上がここまで持ち上げられたのは、仲忠の懸想心ゆえのことである。兼雅にとつては、宰相上の印象は「心深く、をかしう、かたちなどもことなむなかりしを」（楼の上・上 八二九頁）という、難点がない程度であり、三条邸に迎え入れる際に対面する場面においても、美については触れられない。

宰相上に対しては、俊蔭女の他を圧倒する美は描かれない。俊蔭女と宰相上は互いに親しい間柄となり、俊蔭女は宰相上にならば仲忠を託しても心配はないと語る。兼雅も、俊蔭女のたつての願いで、宰相上には通つても良いと承諾する。なぜ、妻たちの中で、俊蔭女が宰相上と懸意になるに至つたかについては、まず、「楼の上」巻に入つて、俊蔭女の位置がすでに安定しており、立場に余裕が生まれたことが考えられる。さらに、宰相上の身分が嵯峨院女三宮などと異なり、俊蔭女を脅かすものでないことも一因ではないかと考えられる。

六 場面V——京極邸における彈琴

最後に俊蔭女の美が描かれているのは、物語の最終局面である京極邸を舞台とした場面である。まず、いぬ宮に秘曲を伝授するために京極楼に移る場面において描かれ、つづいていぬ宮への秘曲伝授が終了し、楼を下りる場面で描かれている。以下、順に引用する。

⑨まづ、尚侍の殿上り給ふ。階は、御手を取りて上せ奉り給ふ。

着給へる、唐綾の御衣一襲、紫苑色の夏の織物の桂、紅の三重襲の御袴。大将、白き綾の単衣、紅の打袷脱ぎ垂れ給へり。几帳のさしはづれたるより、はつかに、几帳より、御様体、七尺余の御髪の瑩しかけたるやうなる、いみじうめでたう見ゆ。

〔楼の上・下 八八三頁〕

⑩尚侍、様体細やかに、なまめかしう、「あな清らの人や」と見えたり。ただ今二十余ばかりにて、装の裾に溜りたる髪、艶々として、裾細からず、また、ごちたからぬほどにて引き添へられ、ゐざり入り給ふを

〔楼の上・下 九二三頁〕

物語における俊蔭女の位置が安定し、俊蔭一族の繁栄もここにきて頂点を極めることとなる。俊蔭女にとつて、十五歳で父を亡くして零落し、「あやしき者」「卑しき者」としての再出発を経て、京中の人々が集まる京極邸で秘曲を演奏するに至ったこの場面は、ここ一番の晴れ舞台であるといえる。この俊蔭女の美は、自らの栄華の象徴なのである。これまで特定の人物とのかかわりの中で描かれてき

た俊蔭女の美は、物語の最終章を迎えるにあたって、特定の誰かではなく、ただ俊蔭女個人の美を物語の中で強調するためだけのものとなった。俊蔭女にとつて、もう他を圧倒する必要はなくなったのである。

七 浮き彫りにされる俊蔭女の（女性）性

俊蔭女の美が描かれるということは、俊蔭女の（女性）性が強調されているということにつながるのではないかと思われる。うつほにおいて兼雅と再会する際には、仲忠の母としての存在であるよりも美が意識される。仲忠は、俊蔭女と兼雅との再会の場面において、うつほの奥深く影をひそめる俊蔭女と兼雅とを取り次ぐ仲介役に徹する。ここでの仲忠は、俊蔭女の子ともというよりも、男女をつなぐ役割が大きいといえ、俊蔭女は兼雅にとつて（女性）なのである。三条邸に迎えられ、仲忠の母であり兼雅の妻であるという立場に置かれるようになった俊蔭女は、朱雀帝に参上するにあたって、再び美が強調される。ここには、兼雅も仲忠も排された、朱雀帝にとつての（女性）として存する俊蔭女がある。蛍の光に照らされて笑う俊蔭女の姿は、母でも妻でもなく、（女性）としての存在そのものであるといえる。また、この時も仲忠は、俊蔭女と朱雀帝との仲介役となる。俊蔭女を参内させるにあたって、俊蔭女の夫である兼雅に事情を隠す。兼雅が事情を知るのは、俊蔭女が尚侍宣旨を受けた後である。しかも、尚侍の宣旨に、兼雅自身、署名することにな

るのである。そして仲忠は、朱雀帝に俊蔭女の姿を見せるため、螢を集める役目も果たす。仲忠は、再三にわたって俊蔭女の（女性）性を引き出す助けとなるのである。ただ、俊蔭女の（女性）性が意識されるのは一時的であつて、尚侍という身分を得ると、再び仲忠の母であり兼雅の妻であるという立場へと戻つていく。

しかし、仁寿殿女御との関係が始まると、俊蔭女の美は強調される。同じ朱雀帝に対して、一方は女御としてもう一方は尚侍としてかわつており、一線は画しているものの、やはり（女性）としての比較は行われており、物語における俊蔭女の（女性）としての位置が意識されている。これは、俊蔭女とあて宮が特に比べられることがないということを考え併せても、仁寿殿女御に対する（女性）としての優位性が意識して示されているといえるのである。

三条邸での俊蔭女は、行事の準備などの妻としての役割を如才なくこなし、安定した座にあつて、特に普段の生活の中で美が描かれることはない。しかし、自身の存在を脅かすかもしれない兼雅の他の妻たちがあらわれると、圧倒的な美が描かれ、（女性）としての顔を覗かせる。物語の中では俊蔭女はあくまでも、零落した昔の自分と兼雅の他の妻たちを重ね合わせて胸を痛める心優しい妻である。しかし、俊蔭女の安定した立場が揺るぎないことは、俊蔭女がもつ美によつて、常に意識させられるのである。

俊蔭女の人生の頂点ともいえる、京極邸での弾琴の場に至つて初めて、誰に対して向けられるでもない俊蔭女個人の美が描かれる

ことになる。特定の対象がいないう美が描かれるということは、俊蔭女の位置が完全に安定したことを意味しており、常に誰かを意識して美しく在り続けた俊蔭女の緊張が解けたことを意味している。もう、世の中つまり物語の中で単に美しい女性と、安心して言える立場を獲得したのである。

俊蔭女の美には、つながりを形成する時の助けとしての働きと、一度形成したつながりを、より確実なものとする効果と、つながりが脅かされそうになつた時の防衛という三つの役割を果たしているといえる。そして、このように美が描かれる俊蔭女は、母でもあり妻でもありながら、兼雅や朱雀帝、仲忠といつた周りの人間によつて一時的に母や妻という服を脱がされ、（女性）として存する舞台へと運ばれるといえる。

結

兼雅との再会を予感するかのように強調される俊蔭女の以前にまざる美は、兼雅との「横の繋がり」の再結成を支障ないものとする。俊蔭女が形成する「横の繋がり」の最たるものは、朱雀帝とのつながりである。この時、俊蔭女は兼雅の妻であり仲忠の母であるという立場に在りながらも一時的にその立場を離れる。そして俊蔭女の美は、朱雀帝にふさわしいまでに高められ、尚侍の宣旨へと話題を運ぶのである。そして、朱雀帝とのつながりは、他の高位の人々との「横の繋がり」へと発展する。

このように俊蔭女は、自身が持つ特質に無意識に助けられながら「横の繋がり」を形成し、広げていく。俊蔭一族は、俊蔭女、仲忠ともに一人子である。正頼一族のように、大勢の娘によって「横の繋がり」を形成していくという方法はとることが出来ない。しかし、物語の最終局面における京極邸での弾琴披露に向かうためには、高位の公達を京極邸に引き寄せるだけの繋がり築いておかなければならず、そのためには俊蔭一族と帝との繋がりである俊蔭女の尚侍宣旨は必至であったといえる。尚侍宣旨から、公達とのかかわりは始まっており、おそらく仲忠一人の力では限界があつたのだろう。

俊蔭女は、仲忠が成し得ない帝とのつながりを、尚侍宣旨という形で手に入れるのである。その結果、俊蔭女自身に仁寿殿女御をはじめ高位の人々とのつながりが生まれ、仲忠とともに一族の繁栄の大きな力となるのである。

最後に、今後の展望を述べたい。今回は紙数の都合もあり、俊蔭女の美に限定して論じたのであるが、俊蔭女の持つ特質については他にもみられ、より大きな視点でとらえる必要があると考える。そしてその際、『うつほ物語』に登場する女性たちの中で、俊蔭女がなぜこのように造型されたのかという書き手の意識も探っていきたいと考えている。

〔注〕

(1) 拙稿「『うつほ物語』の(秘琴)と(あて宮)——『繋がり』の形成をめぐって——」(『古代中世国文学』9 平9・3 広島平安文学研究会)。

(2) 横井孝氏「『宇津保』俊蔭論——俊蔭女を考える——」(『駒沢国文』19 昭57・2 駒沢大学文学部国文学研究室)。

(3) 『うつほ物語』本文の引用および頁数については、『うつほ物語』全(室城秀之校注 平7 おうふう)により、一部私に傍線を付した。

(4) 向井栄子氏「『宇津保物語』に於ける女性」(『成蹊国文』第12号 昭53・12 成蹊大学文学部日本文学科研究室)。

(5) 杉本雅子氏「宇津保物語 俊蔭女(抄)」(『愛知淑徳大学国語国文』第8号 昭60・1)。

——いかわ・ゆうこ、広島大学大学院博士課程後期在学——